



# 大阪の坂道研究

そこにある観光資源を低予算で活性化

2016年3月26日 研究発表別添 参考資料

大阪府立大学 21世紀科学研究機構

大阪検定客員研究員

辻本伊織



父はまだその上に自宅の前から南へ行く時に是非共登らなければならない長い坂に、自分の姓の夏目という名をつけた。

夏目漱石『硝子戸の中』より

## 研究の経緯

全体テーマ・・・無名坂に名前をつけよう

序章・・・・・・研究動機・定義・研究方法など 2014年発表

第1章・・・・・・アベノの坂道10選 2014年発表

[http://www.osaka-kentei.jp/pdf/2014/osk\\_houkoku2014\\_13.pdf](http://www.osaka-kentei.jp/pdf/2014/osk_houkoku2014_13.pdf)

スピンオフ・・・生國魂神社に文学と芸能のプロムナードを 2015年発表

[http://www.osaka-kentei.jp/pdf/2015/osk\\_houkoku2015\\_07.pdf](http://www.osaka-kentei.jp/pdf/2015/osk_houkoku2015_07.pdf)

第2章・・・・・・人名坂の創造 2016年発表

第3章・・・・・・失われた坂を求めて 予定

※今回の発表は第2章である。

『序章』はすでに発表している。よって時間の制限もあり今回の発表スピーチでは触れない。しかし、研究の導入部であり、これを省くと全体の見通しが悪くなるので、今回重複ではあるが訂正・付記するものである。

## 研究の動機

大阪市は水の都と形容されることが多いが、太古の昔はともあれ、現在ではその水が表象するものとあまり縁のないエリアもまた大阪市内に存在する。例えば中央区南部・天王寺区・阿倍野区・住吉区北部がそれである。要するに上町台地だよと言った方が話は早いかもしれない

これらのエリアでは水が表象するもの、例えば海・川との接点がない。よって舟運も川をまたぐ橋もない。若干の池はありそれにかかる小橋はある。

それでは顕著な自然景観は何かと問われれば、坂であると答える以外ない。そしてその坂に関わる現実がいささかお寒い状況であり、なぜ【いまそこにある自然景観】を利用活性化しないのかという当然な疑問がでてくるわけである。

大阪（大坂）という大きく坂に関係した都市名を持っている大阪市における坂の現状はどうなのであろう。さぞかし愛でられているかと思えば、さにあらず。自然景観として放置されているとは思いたくないが、それに近い状態ではなかろうか。

【いまそこにある自然景観】を【いまそこにある観光資源】と認識して、それを活性化利用、成功しているのは**天王寺区の天王寺七坂**くらいである。

大阪の坂道は他都市（東京・京都・神戸など）と比べても観光資源として認識されていない。ましてや東京における偏愛ぶりなどとは雲泥の差がある。その何よりの証拠は無名坂が多すぎることを見れば充分事足りるだろう。

私の研究提案は、**無名坂に名前をつける**ことによって【いまそこにある観光資源】を【低予算で活性化】利用することにつきる。昨今の経済的状況下では単に愛でることで満足してはちょっと困るのである。

## 坂道状況・・・他府県との比較

さて、日本の各都市における坂道状況を少し見てみよう。

大阪に適合する範を求めるためにも【函館】・【尾道】・【長崎】などという全国に知られた坂の町はさておき、ここでは大阪に類した大都市の坂道を考察することとする。

【京都】は衆知のごとく観光化にまことに食欲なところであり、坂道は多いとは言えないものの名所近くのちょっとした坂道には名前がつけられ、標石・説明板も完備している。食欲な観光化の例としては、東山の産寧坂、二年坂は観光名所であったがいつのまにかその延長線に一年坂と称する坂が昔からあったがごとく成立していることなどで明らかだろう。

【神戸】は海と山が迫った地形に占める町の構造から、当然のように坂だらけの町である。よって無名坂も多いのだが、観光重点地区の坂には名を持った坂が多い。北野界限では、ラブホテルの名称になりかかった坂を市民公募で北野坂としたのをはじめとしてハンター坂・トーマス坂などいつのまにか着実に名前を有する坂が増えてきつつあるというのが実感である。

【東京】は下町の橋に対して山手の坂と言われるように、坂道が多くまたその坂道に名前がつけられている割合が大きい。独断偏見的に妄論を弄せば、東京は江戸開府以来、他国人の流入の激しい土地である。主に山の手に住むようになった武士クラスの地理に暗い連中が自分の住居だけでなく行き来に迷わぬよう、数多い坂道に名前をつけ回したとも考えられる。よって新坂・潮見坂・富士見坂・暗闇坂・芥坂など同じ名前の坂がいくつつもある。大名屋敷がそばにあればほぼその名前をつけた坂がある。それが大きな地

理的目印となるから当然のごとく切り絵図などにも記されていくのである。時を経てタモリ氏のごとき坂道偏愛者が生まれるのもむべなるかなと言えよう。

## 韓国TVの取材・・・坂を愛でる民族

坂がそこにあるから愛でる。それは当たり前のことと思っていた。

しかし、それは日本人固有の特徴かも知れない。それに気づいたのは坂道を探訪し始めてからもちあがった次のことによる。韓国のウルサンTVからの大阪商工会議所を通じた取材が2013年9月23日にあり、私はウルサンTVのスタッフたちを阿倍野区内の聖天坂や旭坂などに案内した。その内容はビデオ録画され11月に韓国で放送された。

あわただしい半日あまりの取材をとおして私が知ったことは国が違えば価値観も違う、日本だけの狭い判断では国外には通じないことが多々あるという事実であった。民族が違えば習慣も習俗も違うことは何回かの海外旅行などで漠然と感じてはいたが、国内でそのことをリアルにはっきりと意識させられたのはこれが初めてであった。

韓国では坂は単に不便なものとの認識しかなく、可能ならば切り開いてフラットな道にしたいと思うのが常識である。またその利便性の価値観ゆえ、坂の高台は地価などは安く、日本のように高級住宅地となるようなことはない。ましてや韓国人には坂の景観がどうであるとか、坂名をゆかしく選ぶなどという・・・坂を愛でる行為はまったく理解の範疇ではない。だから、坂がなぜ観光戦略にまでなるのか不思議でしかたないので今回取材させてもらった。

以上のようなことを通訳をとおしてウルサンTVのディレクターは話した。私が得た情報はこれくらいのものでしかなかった。しかし、坂ごとに「あなたはこの坂のどこがよいと思うのか」と聞かれ、坂の由来、まつわる伝説や勾配・屈曲の具合、敷石の見事さなどなどを説明したが、それらがストレートに納得してもらえたかどうか甚だ心許ないことであった。坂を愛でるという心的現象が共通に無い限り、それを観光にまでつなげていくことを期待できないのは当然のことなのかも知れない。

坂を愛でることは日本独自の文化なのか。世界には同じような坂観をもつ民族は他にもいるのだろうか。このことがあって以来現在も、私はこの疑問を解決したいと思いつながらいまだ実行にうつせず怠惰に抱え込んでいる。

### 閑話休題

エピソードはこれぐらいにして、定義などを次に記していく。

## 坂道の定義

坂は道がついて成立する。

よってこの研究・提案では<坂道>を主とした用語とする

- ①坂道はあくまで道としての機能を持っていることが重要である。
- ②傾斜した道であることが条件である。
- ③単なる山や丘の斜面は除外する。
- ④普通に人が上がり下がりできない崖状などは除外する。
- ⑤形状としては階段状も含む。

## 私が研究対象とする坂道の<選定基準>

- ①景観・見晴らしのよいもの。
- ②形状に特色のあるもの。
- ③特定できる建物・樹木などがあるもの。(寺社・屋敷・巨木・石仏・祠など)
- ④坂道自体に、あるいはそのあたりに由緒・伝承などがあるもの
- ⑤急坂を上とする。

※ 明治時代の源聖寺坂にあった好晴館・清柳楼(いずれも料亭)など類するものあれば優先する。茶店でもいい。

そしてこれがもっとも肝心なところだが、提案型研究対象の坂道としては次の3つに絞ることとする。

- ①無名坂(名前があった痕跡がどこにもない)
- ②忘名坂(以前名前があったことは判明できるが今は忘れ去られている)
- ③名前は知られているが表示するものがない坂

※私がフィールドワークで踏査した坂道は300例ほどであるが、現在のところほとんどが上町台地縁辺に位置するものである。そして、圧倒的に無名坂が多い。これほどの特徴のある坂になぜ名前がないのか、と幾たびも疑問に思った。

## 無名坂に名前をつける

名前がなくてはただの傾斜した道にすぎない。

こういった営為は坂に限った話ではないが、名前をつけること・名前があることによって

- ・親しみが湧く
- ・印象が強くなる
- ・覚えやすい・記憶に残る
- ・道の説明に役立つなど便利になる
- ・地図・文献・ブログに引用される
- ・観光資源・民俗資源として利用される
- ・何よりも後世に伝承される

などなど、といった効果が望まれるのである。

相乗効果の特例として、文学者によって作品化されるものがある。

2013年に有栖川有栖によって上梓された、天王寺七坂をタイトルとした7作に2作を加えたオムニバス幻想怪談『幻坂』がそれである。

ここまでくれば、記号としての坂が大阪の風景に渾然一体となって溶け込み、われわれの記憶・心象を形づくるよすがとなってくれる。

## 大正期の旅行案内記に記載された大阪の坂道



『旅行百話』  
著者 大月 隆  
発行所 東京滑稽社  
発売 大正2年  
大阪の西区と北区を除いて64坂があげられているが、そのうち天王寺七坂など有名なもの以外はまったく聞き覚えがない坂名ばかりである。これらは忘名坂（名前が忘れ去られた坂）の代表であろう。

## 坂道の計測に使用する器具



角度計 坂の傾斜を測る

**SuperSlant (エビス) ED 2 0 SSB**

Slantは勾配・傾斜・坂 の意

安価な角度計



赤外線距離計 (面積計)

**BOSCH GLM 5 0**

小さいので持ち運びが簡単。

移動せずに距離や面積が測れるので便利。

私は上記2つの計測器とインターネットでダウンロードした地図を各地点ごとに用意してフィールドワークに臨むのだが、赤外線は明るいときには見えにくいのでできれば専用眼鏡があればOKである。私はサングラスで間に合わせている。他に手押しのコロコロ車式の距離計があるが、かさばるので気軽に持ち出せないのが難点である。

文責 辻本伊織